



移動信徒の集いにて

「島のひかり」ホームページアドレス

<https://shimanohikari.jimdofree.com/>



発行

カトリック浦頭教会  
広報委員会  
五島市平蔵町2716  
TEL 0959-00072  
印刷・(株)才津印刷所

## 「共演」

主任司祭 工藤 秀晃

ポーランドの有名なピアニストであり、後に首相にもなったイグナツィ・パデレフスキ。彼には次のようなエピソードがあります。

ある母親が、幼い息子のピアノレッスンの励みになればと思い、パデレフスキの演奏会のチケットを購入しました。演奏会の日を迎え、親子はホールの最前列近くに座席を確保しました。ところが、開演までしばらく時間があつたため、母親は座席に着くと近くにいた友人と話し込んでしまい、その間に息子が席を離れ、いなくなってしまうことにまったく気がついていませんでした。開演の時間となり、舞台上にスポットライトがつくと、ピアノの前にはその息子がちょこんと座っていたのでした。少年は無邪気にピアノへと向かい、「きらきら星」を弾き始めたの

です。母親は、ただただびっくりしてしまいました。

そこへ、パデレフスキが演奏するため舞台へと現れました。彼はそっとピアノの鍵盤に近寄ると、「だいじょうぶだよ。弾き続けて」と幼い少年にささやきました。そして、少年の後ろから左手を回して、低音部を弾き始めたのです。それから少年を抱きかかえるように右手を反対側へと伸ばして、オブリガートを弾きました。そうして、大演奏家と幼い見習い演奏家は、聴収の満場の喝采を浴びることとなったのでした。

「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」

(マタイ14章27節)

私たちの日々の生活の様々な場面において、準備不足・技術不足・役不足だと感じてしまうことは少なからずあります。それゆえ、時には尻込みしてしまい、その場から逃げ出してしま

いたい衝動に駆られることもありません。でも、私たちがどれだけ不足しているようにも、それでもとどまり、向き合い、チャレンジするならば、その両手でしっかりと包み込み、寄り添い、「だいたいようぶだよ。」とささやいてくださる方がおられます。ただひたすら、その方を信頼して委ねてみると、不足を補って余りあるものへと変えてくださいます。

今のままの自分を差し出しなから、死の枷<sup>かせ</sup>を打ち砕き復活された方との共演を楽しむ、そのような春でありたいと思います。



## 黙想会を終えて

三月十二日から三月十四日まで、二井楽・貝津教会主任司祭・大瀬良神父様を講師に迎え、黙想会が行なわれました。ゆるしの秘跡の大切さ、ガラス瓶や砂等を用いた信仰の大切さ、ブラジルでの中村長八神父様との出会い等、ユーモアを交えて興味深い話しをして下さいました。(以後、小田哲也さんの感謝の言葉) ※昼間の黙想会では、赤尾議長があいさつしました。

### 感謝の言葉

信徒代表 小田 哲也

信徒を代表して、一言、感謝の言葉を述べさせて頂きます。大瀬良神父様、年度末のお忙しい中、三日間に渡り黙想会を

ご指導頂き、ありがとうございます。ました。

神父様は、この黙想会を通して私たちにキリスト者としての生き方を、イエス・キリストのあるべき姿を通して、導いてくださったと思います。

イエス・キリストは、常に私たちの側に共に居て下さり、いっしょに深く見守って下さる父として、兄として、そして友として支えて下さっていることを教えて下さいました。

そこには、神父様が召命を受けて、今まで進んでこられた司祭職の歩みに息づいているものと感じました。神父様の示すイエス・キリストは、笑顔あふれる優しい方であると本当に伝わってきました。私は、けっこう見た目同様、自分中心で罪深いので、少々怖い罰を与えるイエス様を想像します。もっと笑ってもらえるよう、からし種ほどの信仰を育んでいきたいと思えます。

先日、カトリック教報が我が



家に届きました。司祭叙階銀祝、おめでとうございます。隣にいる熊川神父様は、ここだけの話、けっこう老けたなあと感じましたが、神父様は髭は昔から濃かったです。学生の頃とあまり変わらないうえ、羨ましく思います。

ただ、一月の司祭団マラソンでは、南河原口あたりを工藤神父様と仲良く歩いているのを見ました。全く走る気配がなかった。神父様の体もやはり五十過ぎていのだと感じました。

しかし、今まさに長崎教区を背負う主要メンバーになっていくと思えますので、どうぞ肉体的よりも精神的にきついかもしれないが、同年代の神父様と力を合わせて盛り上げて行なって下さい。

小神学校時代の私たちの校長先生であった、小島神父様はダイヤモンド祝（六十周年）を迎えています。私は迷惑ばかりかかっていたのですが、とても誇らしく思いました。ですので、神



父様には、大変申し訳ありませんが、あと三十五年は第一線で頑張ってください。

最後に私たち信徒も、神父様の銀祝のコメントのタイトルである「感謝を忘れず、今後ともよろしくお願い致します」という言葉をお返しして、お礼の言葉とさせて頂きます。



## 中村長八師に学ぶ(7)

### 『キリストとの絆』

奥浦中学校が廃校し、福江中学校と統合されるということを聞きました。残念ではありませんが、少子化の現状に歯止めをかけることは難しいでしょう。

奥浦中学校の校風は、卒業生やその環境に生きる住民によって受け継がれていくと期待しています。

中学校の記念誌をめくりながら、中村長八師の育った家庭や地域、小学校のことを想像しました。早くから両親や姉を亡くし、天涯孤独だったと聞きました。はっきりしたことはわかりませんが、苦勞の多い子供時代だったことでしょう。そのような中で、主任司祭のペルー神父様に見い出され、信仰と知力に磨きをかけた神父様は、充実した神学校生活を送ったと思います。

写真で見える限り、体ががっしりして健康そうです。

広大な原野を馬で、あるいは徒歩で通り抜ける開拓精神が窺えます。ブラジルで列福運動を推進している方々の記録ビデオに描かれていましたが、実に勇敢で宣教の熱意に溢れた司祭だったようです。

今回も、神父様ご自身の便りの中から一部分を紹介します。

司牧の役割として、当然病人訪問がありました。苛酷な条件の中で病気をする人も多く、ある時、病院で日本移民を支えている医療従事者の女性がいると聞き、その病院を訪問しました。女史自身も移民家族の方で、病人との橋渡しや翻訳をしてくださっていました。

女史によると、カトリックの慈善病院には数多くの移民信徒がいました。中村師は、この女史から聞き取りをして、入院患者についての記録を始めました。（便りは次号でも紹介します）



# 司祭団マラソン四年ぶり開催

濱崎 毅

かつて十年間生活を共にし、苦楽を分かち合った同級生神父様と一度は一緒に走ってみたいと思い、今回初めてエントリーしました。しかし、その二人とも多忙のため来れなくなっただで、スタートを少し遅らせ、鬼ごっこの的に一人一人に追いつき、全員にエールを届けることにしました。



堂崎教会を出発し、神父様たちは笑顔で、または顔をゆがめ、ゴールの福江教会目指し汗を流していました。天気にも恵まれ、沿道で応援してくれる信徒のみなさん、かわいい子供たちに元気をもらい、楽しく走り終える事ができました。



## 新役員紹介

信仰教育	木口 誠也
副会長兼会計	江口 初子
浜泊地区員	富上 成美
浜泊地区員補佐	

## 3月16日(土) 移動信徒の集い

今年、移動される方はみじよか娘さん一人。鍋内玖怜彩さんとご両親を囲み、コロナで中断されていた会食が再開。出席された神父様他、大人の皆さんからの励ましの言葉を胸に決意も新たに四月からスタート!!  
彼女に幸多かりしことを…  
五島出身を強みにぎばって下さい。



## 「夢に向って…」

鍋内 玖怜彩

この度、故郷五島を離れ岡山の大学へと進学することになりました。十八年間、暖かく見守り支えて下さった浦頭地区の皆様へ、この場を借りて感謝申し上げます。

私は、「幼稚園教諭になる」という目標を達成するため、この進路を決断いたしました。慣れない土地での一人暮らしが始まることに、寂しさや不安で胸がいっぱいです。しかし、皆様から頂いた声援や多くの教えを胸に刻み、進路実現のために最善を尽くして頑張ります。また、毎日多くのお恵みを与えて下さる皆様への感謝の気持ちも忘れず、御心に適う者として生活していきます。

皆様とお会いできる機会は限られてしまいますが、またご縁がありました際には、どうぞよろしく願います。皆様の健康を、心よりお祈りいたします。

# 祝初聖体・堅信式

南河原在住の横山加代美さん、十二月二十五日のミサにて洗礼の秘跡、一月二十一日には下五島地区合同堅信式にて堅信の秘跡にあずかりました。

これまで長い期間、浦頭教会のミサ内ではSr木口のそばで勉強されてきたと思います。

新たに共同体の一員となられた横山さんも含め、今後ますます豊かな浦頭共同体であるようにと願います。



また、三月三日のミサ内にて鍋内優<sup>ゆ</sup>楽<sup>ら</sup>君（四月から小学一年生）の初聖体式が行われました。Sr古木園長のもと頑張って練習してきた事もあり、すらすらと



祈りを唱えていました。近年では初聖体式が無い年もありますが、今回秘跡をあずかったこの子に神様の恵みが満ちていきますように!!

## 初聖体式を終えて

はじめてご聖体を頂いてうれしかったです。一年生になったら、お姉ちゃん・お兄ちゃんといっしょに頑張ってミサに行きます。

鍋内 優<sup>ゆ</sup>楽<sup>ら</sup>

## 秘跡

◎主よ、永遠の安息を

・ミカエル 中尾 久勝 81歳

一月十六日帰天 浦頭

・ヨゼフィーナ

山見 照子 93歳

一月二十三日帰天 大泊

・ヨアンナ 山本ヨシ子 84歳

二月四日帰天 堂崎

※山本一郎神父様の母

## ◎初聖体

十二月二十五日

マリア 横山加代美 南河原

三月三日

ペトロ 鍋内 優<sup>ゆ</sup>楽<sup>ら</sup> 浦頭

父—孝之 母—めぐみ

## ◎堅信

一月二十一日

マリア 横山加代美 南河原

※下五島地区合同堅信式にて

## ◎ありがとう

次の方より御芳志を頂きました。感謝いたします。

山崎 栄司様 浦頭

## 奥浦慈恵院の歴史⑦

奥浦慈恵院院長 Sr 入口 里子

奥浦診療所には、外来治療だけでは不十分で入院治療を要する患者が多数通院していました。そのため、設備が整っていませんでした。そこで、充実した医療活動を行うため、診療所を拡張し収容設備を整える計画をしました。奥浦は交通の便が良くなかったため、下五島の中心地である福江町内に場所を求めました。昭和23年以前に購入していた福江町松山の土地に「聖マリア診療所」を開設しました。浜崎タカが奥浦診療所から移って医療にあたりました。戦時、戦後の社会は医療の数が非常に少なく、特に離島は医療サービースに恵まれていませんでした。そのため、聖マリア診療所は五島全域から患者が来院して来ました。開設当初9床であった収容床は、昭和30年に医療サービースの充実と高度化を目指して

設備を完備し、病院設立の許可を受けて「聖マリア病院」となりました。その後、次々と増床され、現在では99床に至っています。昭和4年に始まった精米業は、聖マリア病院認可と共に閉鎖され、医療事業への充実を図ることになりました。奥浦慈恵院の診療所として始められた医療事業は、時代の要望と、それに応えた会員たちの努力によって、五島の中心地となる福江市において発展していきました。



奥浦慈恵院の養育事業は、教会の指導者である司祭から多大な援助を受けています。彼らは特に会員の専門知識、技術の習得に力を注いでいます。西欧の教育、文化を十分に吸収しており、会の任務の上からも救済事業に細かい配慮をして指導を行っています。後の邦人司祭たちもやはり最高の教育を受け、社会情勢に明るい人でした。そのため、将来に向けてより質の高い救済活動を行うことが出来るようになります。

マルマン師は明治14年に梅木イサを長崎に送り、梅香崎にあった治国学校で一般教養、事務一般を学ばせました。帰院した梅木イサは院長の補佐役として庶務会計、戸籍の整理など養育院の事務関係一切の事務を行っています。また、対外交渉の仕事にも従事し、養育院の基礎作りの活動が開始されました。当時、女性は発言力を持たず、官庁関係の業務に通じることの困難な

時代であり、五島という離島においてはおおさらのことでした。このような状況の中で、子ども達の養育について問題が複雑で裁判事になる場合も多く、彼女はしばしば裁判所に出廷しなければなりません。明治31年、民法戸籍法が実施されることになり、この手続きも煩雑であったが、彼女がこの仕事に携わり全てを処理することが出来ていました。

助産婦の仕事は明治27年から昭和49年に至るまで、5人の会員が次々に養成されて、およそ80年間継続して行われた活動です。助産婦の仕事は非常に多忙なもので、かつ重労働であったので、会員たちが助手として出産前後の往診、見舞いを手伝っていました。収容児の大半が乳幼児であったことから、その健康管理のために看護師が養成されました。会員の大川フサが明治42年にその資格を取得し、虚弱な乳幼児の養育にその技術を役立たせていました。



## 聖なる二日間

今年も聖木曜日に主の晩餐に倣い、各委員会から二名程度、計十二名の代表者の「洗足式」が行われました。

「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければなりません。」

これは聖書の中の言葉ですが、教皇フランシスコも「最も強き者が最も小さき者に奉仕しなければならぬ」と語られています。



す。また、復活徹夜祭のミサ後には、青年会が準備された卵の配布を行いました。浦頭教会のイースター・エッグの歴史は長く、卵を染めたり、絵を書いたりとその時代で色々な形を取りつつも、現在まで続いてきました。どうしても復活祭に來れない方へ…あの人にも届けたい…そう思い、この卵を持っていかれる方も多いと思います。準備された青年会及び協力者の皆様、ありがとうございます。



## ふる里だより

### 奥浦 ジュニア バレーボールクラブ 大活躍

一月二十八日開催の新人戦県大会で、五年生以下のチームが県ベスト4に入り、六月末に行なわれる全国大会予選会のシード権を獲得しました。

又、六年生の山崎光太郎君は長崎県選抜のキャプテンとして、東福岡杯、ドリームマッチに出場。両大会で優勝し、二度の九州チャンピオンに輝きました。



## 第20回市民駅伝大会に参加して

赤尾 誠

二月十一日、第20回市民駅伝大会に奥浦地区のメンバーとして参加しました。

開催二週間前に巡り巡って四区の走者になりましたが、予想以上に雨の日が多く練習不足に悩まされたり、一年間ずっとお尻の神経痛と闘ってたりと、自信と実力は去年の自分には届いてはいませんでした。

しかし、当日は天気にも恵まれ、前の三人が速かったこともあり、難なくタスキを無事に繋げることができ、チームの結果も総合六位と健闘しました。

私は来年には四十歳になりますが、身体の衰えを感じつつも、この歳になってやっと走りのコツが分かったりと、成長できる喜びも感じています。

自分の身体と向き合いながら、来年も再来年も駅伝に参加できるように、努力を重ねたいと思います。

# 「奥浦中学校 閉校に想う」

木口 利光

終戦直後の昭和二十二年に誕生し、七十七年の歴史を数えた奥浦中学校が本年三月で閉校となり、二月二十五日に閉校記念式典が行なわれました。奥浦地域の急激な少子化の荒波の中で生徒数も三十名を割り込み、閉校という苦渋の選択をせざるを得ない状況となりました。

学校創立時は校舎建設のため、先生や生徒、地域住民も力を合



せ裏山を削り、入り江を埋め立てました。近年の輝かしい歴史として平成十九年度、二十年度、二十三年度の三度に渡る全国ロボットコンテストでの優勝があります。七十七年間の奥中総在校生は四千名余り。奥中を巣立った全ての生徒には、それぞれの懐かしい青春の思い出、友との友情があります。中学校としての役割はなくなっても、奥浦は残り、全ての卒業生、在校生の宝物のような思い出は残ります。

”奥浦中学校、そして  
奥浦よ。永遠なれ“

## 椿マラソンを楽しむ



二月二十五日、前日よりの雨で開催が危ぶまれましたが、天候も崩れる事も無く第24回椿マラソンが開催されました。

現時点で長崎県内で唯一のフルマラソン大会という事もあり、北海道や沖縄、島外どころか県外からも多数の参加者が集い、フル、ハーフ、リレーマラソンに四〇〇名程のランナーが岐宿、三井楽を巡る難易度の高いコースに挑戦されました。

タイムを競う者、走りを楽しむ者、景観を楽しむ者、参加者の方それぞれの楽しみ方でレースに挑み、三七〇名程の参加者が、無事に完走しました。

## 編集後記

昨年、とうとう五十路の扉を開け進み始めたと思っていたら、あっという間に一年が過ぎ、島ひかりが発刊される頃には五十一歳になっているだろうと思うと、時の流れは年齢を重ねるごとに早く感じるって話は本当なんだなと、しみじみと感じる今日この頃です。

残念なことに、奥浦中学校の閉校式も終わり、グラウンドの満開の桜を見ると、寂しさや物悲しさを感じてしまいます。

平和のばら保育園も、後二年度で閉園されるとの発表もあり、浦頭小教区の周囲の環境も寂しくなりつつありますが、今、奥浦小学校で育つ子供達は元気いっぱい頑張っています。

地域の為、信仰を子供達に引き継いでいく為、この浦頭小教区から子供達の声を無くさない為にも、出来る事は小さい事でも何でもやって行こうと思う、今日この頃です。

木口 誠也